

# 海外留学プログラムにおけるマレーシアの可能性\*

— 英語教育の観点から —

濱崎 大\*\*

The Study Program Possibilities in Malaysia.  
—From the Perspective of English Education.—

Dai HAMASAKI\*\*

**キーワード：**海外留学プログラム、国家資格フレームワーク、英語教育、インターンシップ

## 1. はじめに

周知の通り、英語の語学力を向上させるため海外へ留学する学生数は非常に多く、その対象となる国はアメリカ、カナダ、オーストラリアがその代表的な国々（文部科学省2017）となっている。昨今その対象となる国はより選択肢が増えており、経済的にも負担の少ないアジアでの留学に目を向けるものも少なくない。中でもフィリピン<sup>1)</sup>やインド、シンガポールやマレーシアが、その対象となってきた。本研究では、長崎ウエスレヤン大学（以下、本学と表記）がマレーシアのベルジャヤ大学と結んでいる語学・インターンシップ留学プログラムの視察<sup>2)</sup>をベースに、アジア内留学においてもマレーシアでの留学プログラムがその他のアジア地域より将来的に大きな可能性を持っていることを論じていく。なお本稿は、現在日本国内で行われている国家資格フレームワーク（National Qualifications Framework：以下、NQFと表記）導入にあたっての審議を深めることを目的としたものではなく、あくまでも学生が英語語学力の向上に向けて参加する留学プログラムを発展させることを目的としている。また、視察ではインターンシップ先を見学することはできたのだが、本学の学生が実際に取り組んでいる様子は見るができなかったため、その件に関しては次の課題とし、その詳細はあげないことを、先にことわっておきたい。

## 2. なぜマレーシアなのか

ここでは最初にマレーシアのことに関して大ま

かに触れ、留学先としてのメリットを紹介していく。特に教育の質という点で、NQFを導入している点に注目をおき、英語を学ぶ場所のひとつとしてアジアの他の国々よりも大きな可能性があることを提案したい。

### 2. 1 多民族国家マレーシアの利点

マレーシアは日本と異なり多民族国家である。このような多民族国家で経験できるものは、特に日本人学生にとっては語学力だけではなく、異文化理解という点でも利点は大きい。マレー系、インド系、中国系とあげた順に人口比が高く、その他多数の先住民族から構成される多民族国家であるために、共通言語として英語が広く使用されている。つまりアジア圏とはいえ、私生活から英語に触れることができるわけである。短い滞在ではあったが、異なる文化背景をもつ民族が、調和の中で生活を営む雰囲気を肌で感じることができ、異文化に対する許容の深さを実感した<sup>3)</sup>。また、共通言語として英語が使われる点においての利点では、フィリピンでの留学のようにイマージョン教育<sup>4)</sup>的要素が強いところもあるのだが、決定的な違いは中国系が多い点で、街のいたるところには「漢字」の標記が目立つため、学生にとっては「息抜き」的要素もあるところが特徴である。和泉がいうように、確かに「イマージョン教育では、カリキュラムからテスト作りに至るまで、教育言語が未発達な学習者を念頭にプログラムが作られている」（和泉2016, 173）点においては、そのプログラムを導入している国々の学内における留学生の負担は考慮されているのだが、異国で学ぶということは、学外にでれば否が応でも他言語で生活しなければならないサブマージョン的要素があることは否めない。まさに学外ではある意味

\* Received December 21, 2017

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

「強制的に」言語使用を強いられ、「溺れるか、泳げるか」といった選択を言語者に迫る」(同, 173) そのサブマージョン的な要素も側面としてある海外留学で、学外での生活にかかる心的負担というものは考慮すべき点である。特に「食文化」の側面と言えば、注文の段階である程度理解できる中華料理が多いことは、利点のひとつと考えることができるであろう。

英語が広く使用されているばかりでなく、日本人に「身近な」文化も織り込まれており、異文化理解も深められるマレーシアの多民族的風土は、日本人学生が留学先として選ぶにあたって非常に魅力的であるといえる。また、「英語」に対する「共通語」としての認識についてもメリットがあり、この点については視察した本学の留学プログラムの紹介の際に詳しく述べていくことにする。

## 2. 2 経済的負担の軽減という利点

アジア内での英語語学留学の魅力のひとつに経済的負担の軽減があげられる。しかしながら日本人の学生が持つイメージの中に「発展途上」、「過ごし難い」などのネガティブなイメージもあるようで、フィリピンのセブ島のようないわゆるリゾート地的な場所での留学や、シンガポールのような「都会的」なイメージの場所が人気なのはその点も大きく作用しているといえよう。しかしながら、シンガポールにおいては経済的負担の軽減という恩恵も大きくは受けられなくなってきたのが現状で、マレーシアにおいてはこのメリットは高い。

首都はクアラルンプールと呼ばれる都市で、ここ最近の発展は目覚ましいものがある。滞在したクアラルンプールのブキッ・ビンタンと呼ばれる地区でも、開発が進んでおりさらに高層ビルが立ち並ぶ予定となっている。また、その付近の地区ではあの有名なペトロナス・ツインタワーを上回るタワーが建設中で、完成すれば経済発展の象徴とよべるものになるだろう。

マレーシアの通貨はリンギットと呼ばれるもので、この1年間の推移を見ても1リンギット=25~27円程度である。今後マレーシアの発展とともにリンギ高になる可能性も否めないが、ここ10年の推移を見ても円とリンギットの逆転現象が起こるとは考えにくく、先にあげたアメリカ、カナダ、オーストラリアで過ごすよりも経済的な負担は軽いといえよう。滞在中過ごしたエリアはクアラルンプールでも屈指の繁華街でマレーシアで

も物価は高いほうだろうが、それでも衣食住にかかるコストは、日本の1/3~1/2であった。ただ、アジア圏で英語が学べる他国のインドやフィリピンにおいても、この経済的な負担軽減メリットは同様のことがいえるので、マレーシアに特化した条件ということとはできない。しかし首都の都会度でいえば、地下鉄だけでなくモノレールや鉄道も整備されており、その交通網にのってショッピングや観光も楽しむことができる。こういった生活インフラの発展している国、つまり「都会度」の高いわりに物価が安いということは大きなメリットである。

## 2. 3 国家資格フレームワーク (NQF) 体制による教育の質保証という利点

さきにあげたように、ここにおいては日本におけるNQFの導入や整備の問題など、現在あがっているそれらの審議を目的とはしていない。教育の質の向上に役買っているNQFが、マレーシアでも取り入れられており、その点においてアジアの他の諸国よりも英語語学留学先として、可能性を大いに秘めていることに焦点をあてていく。

ここであげる資格フレームワークとは、いわゆる高等教育機関・提供者が提供する教育の質を維持・向上させるために設定する枠組みのことである。日本での一般的な「資格」という言葉に対する認識は、職業能力的なものに対して使われる一定の基準である場合が多いのだが、OECDではこの「資格」を以下のように定義している。

A qualification is achieved when a competent body determines that an individual has learned knowledge, skills and/or wider competences to specified standards. The standard of learning is confirmed by means of an assessment process or the successful completion of a course of study. Learning and assessment for a qualification can take place during a programme of study and/or workplace experience. A qualification confers official recognition of value in the labour market and in further education and training. A qualification can be a legal entitlement to practice a trade. (OECD2007: 21-22)

つまり、この「資格」という考え方は職業能力的なものだけではなく、アカデミックな能力(学位)に対してもあてはめることができるものであ

ることがわかる。この枠組みのシステム整備が進んだ背景には、EU体制下における人材移動の活発化があった。加盟国間において国家間のボーダレスが進み、ひとの移動が活発になる一方で、人材の「見極め」、つまりある個人のもつ知識や能力等の判断材料が必要になってきたのである。職業・アカデミック教育水準の高い国と、そうでない国においての資格・学位を「同じもの」と考えることは難しい。NQF整備の背景には、この判断の「基準」となるものと、そしてこの見極めの「誤差」をできるだけなくすための取り組みがあげられるのだが、当然そのシステム整備の中には、教育の質向上もターゲットにされている。

マレーシアにおけるこのNQFにあたるシステムは、「マレーシア資格枠組み<sup>5)</sup> (Malaysian Qualifications Framework: 以下、MQFと表記)」と呼ばれるものである。マレーシアにおける高等教育制度は、イギリスの制度に強く影響を受けている。その根拠にはイギリスの植民地であったという歴史があるのだが、ここで特にあげたい点は「ツイニング・プログラム<sup>6)</sup> (twining program)」と呼ばれる留学制度で、教育を連携させてイギリスで学位をとれるしくみになっている。この連携にはMQFが大きく関わっていることは言うまでもなく、マレーシアは制度的にも、留学先としてもイギリスとの繋がりが強い。このツイニング・プログラムにおいてマレーシアの制度はアジア内では歴史が深く、またパイオニア的なものである。NQFが発展してきた背景には、ひとの移動があることは紹介したが、イギリスの資格枠組みを習ったマレーシアからは多くの学生が渡英しているだけではなく、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドといった日本でも人気の語学留学先としてあげられる国々に渡り学位取得を目指している。NQFの目的のひとつである資格・学位の「誤差」の解消を考えるのであれば、マレーシアにおける教育の「質保証」も、当然イギリスやその他欧米の留学先の基準値に沿うように「レベル設定」がなされており、マレーシア内で語学を学ぶことが、意義の高いものであることは判断に困らない。

このように、アジア諸国での語学留学プログラムを考える際、マレーシアが教育や生活インフラの質も高く、経済的にも学生にとって意味のある国であることをここまであげてきた。また、異文化に対する許容を身につけることができる点や、MQFをもってイギリスや他の代表的な欧米の

国々と「制度的」にも深くつながりがある点はアジア内でも特化している点としてあげられ、この国の大学との留学プログラムを進化、発達させることが、今とそして将来の学生にとって意義の高いものであることは理解してもらえたのではないかな。

### 3. ベルジャヤ大学と語学インターンシップ留学プログラム

これまでは語学留学先という点に焦点を絞りながら話を進めてきた。ここではさらに、視察先である本学のAU+<sup>7)</sup> 協定大学であるベルジャヤ大学と2017年8月からスタートした語学インターンシップ留学プログラムを紹介しながら、語学留学先としてのマレーシアの可能性を考える。ここでは、この大学の特徴であるキャリア教育という側面から語学に対するモチベーションの向上につながる可能性について論じていく。

#### 3. 1 ベルジャヤ大学と語学インターンシッププログラムの概要

ベルジャヤ大学<sup>8)</sup> は、マレーシアの大手財団ベルジャヤ・グループが経営する大学である。「ベルジャヤ」とはマレー語で「成功」を意味し、この財団はホテルや航空会社の経営のみならず、セブンイレブン、ウェンディーズ、スターバックスなど、国内で多くのフランチャイズの権利まで持つその名の通りの財団である。昨今、大阪にもホテルを立ち上げるプランもあるようで、その経営を日本にまで広げようとしている。大学はクアラルンプールで一番の繁華街にある巨大なショッピングモールの中にあり、そのモールにはベルジャヤ・タイムズスクエア・ホテルも入っている。ホテルやショッピングモールの様々な店には、ベルジャヤ大学で学ぶ学生や卒業生が働いており、かれらは「大学で」企業が求めるスキルを培われてきた。多方面にわたる経営を知る企業がつくりあげてきた大学だからこそ、現場での実践に必要なスキルをより認知しており、そのスキルをMQFに基づき教授している。

本学とベルジャヤ大学が結ぶ語学インターンシッププログラムは、4週間を半期にわけ、前半に語学プログラム、そして後半に希望する場所でのインターンシップを行うプログラムである。希望とはいえ、インターンシップを行う前には事前に働き先との面接が行われ、そこで語学力を含めた適性を判断された後に行き先が決定されるように



なっている。学生は語学プログラムを受講中に、希望するインターンシップ先の面接員のスケジュールにしたがって面接を受け、後半のインターンシップへ進むことになる。今回のプログラムでは本学のAU+提携大学である梅光学院大学、その他都市部の大学からも参加があり、本学からの参加者6名を含む20名ほどのグループであった。

### 3. 2 企業がつくりあげた大学

企業が創りあげたベルジャヤ大学の基本理念としてあるのは、実践に直結した教育である。ここにもマレーシアの大学での留学プログラム充実化の魅力がある。今回の視察で、大学の施設案内をしてくれたAnita Tan (Director Planning & Development) は、施設を紹介してくれる際に、「教室と現場の融合」を何度も繰り返して述べていた。例をあげると、大学内にあるカクテルやモクテル<sup>9)</sup>のつくり方を学ぶ教室のあるフロアには、実際のバーカウンターがあり、習熟度の高いレベルにある学生は、このカウンターの開店時にスタッフとしてカクテルやモクテルを客に振舞い、さらに実践習熟度を高めている。まさに大学で学ぶことが、実践につながっているという意味では、現在日本で進められている「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関」の参考にもなりうる。2. 3でもあげたようにツイニング・プログラムと関連付けると語学プラスキャリアという日本の高等教育に求められだしてきた社会的ニーズと、留学先で言語習得を目指しながら学位取得というのは魅力のひとつである。

ベルジャヤ大学では、英語を専門的に学ぶコースはなく、ホスピタリティ、ツアーリズム、またビジネスなどを学ぶコースが主である。ここで進めている話とこの大学が持つコースをあげると、「英語を学ぶ場」というよりも「職業教育の場」といった響きが強いのだが、そう響かせているのは現代日本社会における語学に対する視点の問題だと感じる。特に高等教育においての語学修得は「標的」となってはならない。いわば語学は「手段」であって、この「手段」を磨くことで、より明確に「標的」を狙うことができるのである。「英語」を身につけることが到達点、つまり「標的」ではなく、「英語を身につける」ことによって、そのさきにある「キャリア」、つまり「標的」をより明確に狙うことができるようになる。あらためて考えると、当たり前のように感じることで

あるが、一般的にアカデミック教育とキャリア教育という「ことば」が、日本の大学では切り分けて考えられている以上、英語修得がアカデミック教育の「標的」と誤って考えられがちになっていることは否めない。かつての日本が開国をし、諸外国の医学や科学技術という実学（標的）を学ぶことを迫られた際、手段として語学修得を先行した時代は考え方としてはシンプルであった。しかしながら、現代日本社会の英語修得に関する考え方は、そうシンプルな考え方にはなっていない。（むしろシンプルな考え方がよいというわけではないが、議論の中でベクトルが違う方向<sup>10)</sup>に向いている傾向にあるならば基本にかえることが大切だと考えている。）そういった意味では、ベルジャヤ大学が考える語学の修得とそのプログラム内容は、とてもシンプルな構図であり、まさに「教室と現場の融合」とは、アカデミック教育が、同時にキャリア教育という構図になっていた。学生も語学プログラムを受講している際には、日本で受ける英語の授業では見せない姿を見せていたのはそのためではないだろうか。その語学プログラムの詳細は次に述べたい。

### 3. 3 ベルジャヤ大学語学プログラム

ベルジャヤ大学での2週間にわたる語学プログラムの内容は、端的に言うところインターンシップのための語学教育である。まさに「企業がつくりあげた大学」らしいプログラムであった。午前の部（9:30~12:00）と、午後の部（13:30~17:00）の講義時間になっており、大学の語学教員が「英語」で講義を行う。プレイスメントテストをプログラム初日に行い、習熟度別にA、Bクラス<sup>11)</sup>の2クラスにわけ、それぞれ10名ほどで1クラスが構成されるようになっていた。日数の制限もあり、深く視察できなかったことは次の課題であるが、今回はそれぞれのクラスを半日ずつ視察した。

Aクラスでは、かなり文法にフォーカスした講義を行っていた。当日は履歴書の書き方を前提に時制を教えていたのだが、その授業形式は日本の形式に近く、練習問題を解き、そして修正の繰り返しが多かった。形式的な違いといえば「英語」で学んでいる点だが、既にネイティブ教員も多く教える日本の大学で学んでいる学生にとっては、大きな変化を受けているようには感じられなかった。しかしながら、マレーシアという「外国」で、これから「インターンシップを行う」というモチベーションを向上させる要素がある点におい

ては、日本で行う同じ形式の講義でも、大きな差を感じた。

Bクラスでは、「文法」という点においては、Aクラスよりも英語をかなりラフ（基本的な文法は押さえながらも、細かい文法ミスには注意しない。）に考えて講義を進めていた。ここでは英語の苦手な学生が多いためか、「インターンシップ」という前提をあまり前にだすことなく、まず「話す」ことに焦点をおいていた。視察当日は、Yes/No Questionから始めて、疑問詞を使った疑問文をつくる練習を行っていたが、この「話す」という点に重きをおいたアクティビティでは、学生を前に1名出して、その学生が考えた名詞を他の学生たちが質問しながら当てていく会話のやり取りを行っていた。これも日本の中学校や高校でALTが行っている授業とあまり変化を感じなかったのだが、インターンシップ先が行う面接の際に「受ける質問」を想定して疑問文の勉強をしていることを明示して講義を行っていたので、前提に「インターンシップ」があることは消滅しておらず、またモチベーションの向上にこの前提を利用していたことは大きいと感じた。Aクラスと同様に、「外国」で、「インターンシップを行う」という効果は、ここでも同様に働いていたといえる。

視察はできなかったが、語学プログラムのスケジュール表には、学外に出てマレーシアで実際に使われている英語に触れる機会も多く提供されているようで、A、Bクラス共に「外国」で学ぶ動機づけや、様々な文化背景（ここでは言語背景と言ってもよい。）を持つ人々の多様な英語に触れる機会もあり、「共通語」としての英語に対する認識も得られるという意味では、多文化社会の中だからこそ得られる知識や経験もメリットとしてあげられよう。帰国後、学生が本学で行った報告会でのプレゼンテーションでも、この学外での語学アクティビティが紹介され、現地の人々が話す英語のアクセントにも様々あり、日本の講義で聴かされてきた英語との違いに驚きを感じていたこと、また英語にも「多様性」があることをあげていたことは印象深かった。英語の多様性に対する認知ができただけでも、かれらの学びに大きな影響をあたえたことだろう。

短い視察であったが、ベルジャヤ大学における語学プログラムの有効性を見ることができた。「マレーシア」という外国で、「インターンシップ」という目標を持って、「英語」を学ぶことはそこで学ぶ学生たちの動機付けの理由には十分で

あったようである。第二言語教育の用語を使えば、「目的を持った意味ある活動（goal-directed meaningful activity）」（和泉2016, 191）であるタスクを通して語学を学ぶタスク中心言語教授法（Task-Based Language Teaching）<sup>12)</sup> 的な教授要素が強く、「インターンシップ」という「タスク」に向かって学習を促す語学プログラムだといえる。ただし、インターンシップが「言語形式」や「言語機能」、また「意味機能」のどこに焦点をあてた「タスク」であるのか、またどこに比重をおいて学生に学習させるのか、つまり「インターンシップ」というものを、どの程度の前提として考えて英語の教授法を見出していくのか、さらに学生個々の習熟度に合わせた現場での対応策、あるいは先にあげたように、講義形式としては日本でやられてきているものと大差なく、これらの課題をあげれば、まだ大いに改善の余地があり、ベルジャヤ大学のプログラムコーディネーターや、講師とディスカッションをかさねるなどしてよりよいプログラムにしていく必要があるのは確かなことである。しかし、ここではマレーシアにおける留学プログラムの可能性について話をつづけてきたので、それはまた別の場を持って議論して行きたい。最後にただひとつ明確に言える点は、どの学生もインターンシップ先に明確な希望<sup>13)</sup>を出し、その準備に向けて英語語学力を向上させるために、ベルジャヤ大学の学内外でひたむきに取り組んでいたことがあげられる。

#### 4. おわりに

これまでアジア圏内で、マレーシアという国がもつメリット、多民族国家での異文化理解を深められる点、生活インフラの整備された国であるにも関わらず物価の安い点をあげ、そして修学が一番の目的である「教育の質」という点においてもMQFの制度を持ち、これにより欧米の諸外国とのつながりもあるこの国が大きな可能性を持っていることを論じてきた。

はじめに述べたように、日本でのNQF導入の審議をここで行うことは目的ではないのだが、確かに日本においてもこれが制度化されればマレーシアと日本の「互換性」がもたれプログラムがより促進されることであろう。このひとつの問題点として日本からの人材の流出があげられるだろうが、日本における教育の「質保証」も同時に促され、人材の流入につながる可能性だって否めない。本稿でその審議を深めることを目的としな

かったのは、現場レベルでの対応次第で「その大学にあった」留学プログラムが構築可能であることを述べたかったからである。今回の視察でベルジャヤ大学のVice-Chancellor & Chief ExecutiveであるWalter C. K. Wongは、本学との話し合いを深めお互いの合致があれば、様々なプログラムの構築や展開が可能であることを強調し、あらためて今後の協力を約束してくれた。しかし、これにはお互いの理解と検討が必要で、非常に労力のいることである。最後に述べたいのは、今回の視察で大きく感じたことで、我々教育の現場に携わる人間は、「だれの利益」のために教員としての職務に就いているのか、その答えを再度確認できたことにある。それはまぎれもなく「学生の利益」のためであり、これは学生の未来を担う我々の責任である。マレーシアでこのプログラムに参加していたすべての学生の、その生き生きとした姿を見れば、日本における制度の整備化のような「大きな」取り組みを待つことなく、「小さな」取り組みでもよりよいプログラムの構築が可能であるはずである。そしてこのマレーシアには、かれらの利益を生み出す可能性がある。そのために、今後もマレーシアとの関係を深め、労力を惜しまず課題のひとつひとつをクリアできるように努めて行きたい。

## 付記

本研究は、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所の研究助成事業の援助を受け実施した調査研究に基づくものである。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、さまざまな質問に回答してくださり、資料までご提供いただいたWalter C. K. Wong (Vice-Chancellor & Chief Executive) 先生、そして視察のコーディネートをしてくださったAnitaさん、Hazryinさんに心よりお礼申し上げます。また、すべての視察がうまく運ぶようにとりはからってくださったマダムMae (Executive Director/ CEO) にも深く感謝いたします。

## 注釈

- <sup>1)</sup> なかでもセブ島は人気の留学先となっている。
- <sup>2)</sup> 2017年8月18日～25日、1週間ほどの視察であった。
- <sup>3)</sup> 筆者はアジア圏ではないが、同じ多民族国家

カナダでの約9年という長い留学経験をもっており、その経験をもとに論じていることを理解してもらいたい。

<sup>4)</sup> イマージョン教育とは、「英語漬け教育」とも呼ばれており、文字通り外国語に浸して修得を目指す教育法のひとつである。

<sup>5)</sup> MQFに関する詳細は「マレーシア高等教育の質保証」、[http://www.niad.ac.jp/n\\_kokusai/info/malaysia/](http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/info/malaysia/)を参照。

<sup>6)</sup> マレーシアではおもに「1+2」(1年間マレーシアの大学で勉強、その後2年を欧米の連携大学で勉強)、「2+1」(2年間をマレーシア、その後1年間を連携大学で)、そして「3+0」(マレーシアで3年勉強するが、連携大学の学位が取得できる。)の3つのタイプがある。詳細は「長崎発 観光地域づくり中核人材養成プログラム事業成果報告書」(126-127)を参照。

<sup>7)</sup> AU+とは、アジア各国11の大学からなるアジア大学連盟のことである。日本、韓国、マレーシア、台湾、中国の大学から構成されている。

<sup>8)</sup> ホームページURL：<http://www.berjaya.edu.my/home/>

<sup>9)</sup> イスラム教徒が飲むアルコールの入っていないカクテルのこと。

<sup>10)</sup> 寺島は自身が中国人留学生を教えた経験やフィリピンを経済力などを引き合いにだして、英語力＝研究力、英語力＝経済力ではないことをあげている。とくに現代日本の英語修得に関する議論は「なぜ必要なのか」というところよりも、「国際化」、「異文化理解」や「グローバル」などのワードとも簡単にくっつけられて落ち着いているところに問題があるように感じる。

<sup>11)</sup> Aクラスは、習熟度が高いクラス。

<sup>12)</sup> これについては和泉(2016)が『第二言語習得と母語修得から「言葉」の学びを考える』の中で非常にわかりやすい解説をしている。また松村編(2017)『タスク・ベースの英語指導法』も、これまでの議論や実践を非常によくまとめられた一冊である。この領域に関する研究者の間では、広く知られた用語なのでここでの詳細は省くことにする。

<sup>13)</sup> 本学の学生は、ホテル、オフィス、そして幼稚園でのインターンシップを希望して、それぞれ希望にかなった職種のインターンを行ってきた。

## 【参考文献】

和泉伸一, 2016, 『第二言語習得と母語修得から

「言葉の学び」を考える』, アルク

一般財団法人英語教育研究所, 2008, 「英語イマージョン教育とは, <http://riete.org/immersion.html>, 2017.10.19

高橋美紀, 2002, 「留学生教育における国際教育協力の可能性ー日本マレーシア高等教育大学連合プログラムを事例としてー」『国際教育協力論集』第5巻第1号125-136, 広島大学教育開発国際協力研究センター

寺島隆吉, 2009, 『英語教育が減びるとき』, 34-35, 明石書店

独立行政法人 大学評価・学位授与機構, 2014, 「マレーシア高等教育の質保証」, [http://www.niad.ac.jp/n\\_kokusai/info/malaysia](http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/info/malaysia), 2016.11.29

村松昌紀, 2017, 「タスク・ベースの発想と言語教育の方法論」, 村松昌紀 (編), 『タスク・ベースの指導法』, 大修館書店

マレーシア政府観光局, 2017, 「マレーシアの概要」, [http://www.tourismmalaysia.or.jp/kihon/kihon\\_b.htm](http://www.tourismmalaysia.or.jp/kihon/kihon_b.htm), 2017.10.19

文部科学省, 2012, 「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の留学者数」等について」, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm), 2017.10.12

文部科学省, 2017, 「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の在り方について」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/061/gaiyou/1356314.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gaiyou/1356314.htm), 2017.10.26

楽天証券, 2017, 「マレーシアリングgit／円(MYR/JPY):外国為替レート」, <https://www.rakuten-sec.co.jp/web/market/data/myr.html>, 2017.10.19

OECD, 2007, “Qualifications Systems – Bridges to Lifelong Learning.”

